

古代歴史文化協議会共同調査研究事業「古墳時代の玉類」

伊藤雅文・中屋克彦・林 大智、西田昌弘（石川県教育委員会文化財課）

1. はじめに

日本の各地には、素晴らしい歴史文化遺産がある。これらの遺産については、それぞれに調査研究が進められ、各地域にその成果が蓄積されている。しかしながら、それらは地域ごとの研究成果としてまとめられることが多く、列島を俯瞰するような広い地域の調査研究として発信される機会は少ないのが実情である。

そこで、個々の地域研究では見えにくかった古代史の大きな流れを解明し、その成果を広く情報発信するために、古代歴史文化にゆかりの深い埼玉県、石川県、福井県、三重県、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、福岡県、佐賀県、宮崎県の14県が連携して、平成26年に「古代歴史文化協議会」を設立した。

この協議会の設立準備段階から、14県に共通して存在し、比較的容易に調査対象となる考古資料を研究することで、全国的に古代歴史文化研究の水準を高め、また新しい事実を発見することが期待できることなどを考慮して、多くの研究対象候補から「古墳時代の玉類」を最初の研究テーマとすることとなった。

それぞれの県の研究担当者が3年半にわたって調査研究を進め、各県で蓄積されてきた研究成果を比較検討する研究集会を重ねた。そしてその成果を成果図書『玉－古代を彩る至宝－』にまとめ、あわせて展覧会「玉－古代を彩る至宝－」を東京都江戸東京博物館と九州国立博物館で開催した。

今回はこの共同調査研究事業「古墳時代の玉類」について報告する。

2. 参加の経緯と体制

古代歴史文化協議会は、古代歴史文化賞を主催していた古事記・日本書紀にゆかりの5県（島根県、奈良県、三重県、和歌山県、宮崎県）の知事が、平成26年1月に開催したシンポジウムの席上、古代の歴史文化に関する調査研究・情報発信を各県共同で行うことを提案し、古代の歴史文化にゆかりのある自治体に参加を呼びかけて設立された組織である。

石川県にも同年6月に参加の打診があり、本県の歴史的・文化的魅力を発信し、誘客につなげることができるとの観点から、県文化財課を窓口、（公財）石川県埋蔵文化財センターにも協力を得る形で参加することとなった。

各年度の担当は以下のとおりである。

平成26年度：県文化財課 土屋 埋文センター 伊藤、澤辺、林、西田、関

平成27年度：県文化財課 土屋 埋文センター 伊藤、澤辺、林、西田、関

平成28年度：県文化財課 土屋 埋文センター 伊藤、中屋、林、西田、佐々木

平成29年度：県文化財課 伊藤、土屋 埋文センター 中屋、林、西田、佐々木

平成30年度：県文化財課 伊藤、松山 埋文センター 中屋、林、西田

3. 「古墳時代の玉類」共同調査研究の歩み

（1）研究集会等

研究の進め方の検討会（奈良県）

開催日：平成26年10月20日（月）・21日（火）

会 場：奈良県立橿原考古学研究所

- ・研究の進め方（「古墳時代の玉類」の対象・時期・集成を中心に）、共同考察テーマについての意見交換

第1回研究集会（奈良県）

開催日：平成27年3月12日（木）・13日（金）

会 場：奈良県立橿原考古学研究所

- ・基調講演

「玉作りの研究史について」 島根県埋蔵文化財調査センター 岩橋孝典

「「玉」をめぐる研究について」（公財）石川県埋蔵文化財センター 伊藤雅文

- ・各県の成果報告、共同考察テーマの検討、分科会の設置と提案

第2回研究集会（島根県）

開催日：平成27年7月30日（木）・31日（金）、オプション 8月1日（土）

会 場：松江テルサ

- ・基調講演

「出雲玉作り研究の現状と課題」 岡山県古代吉備文化財センター 米田克彦

「文献史料からみた出雲玉作りについて」 島根県古代文化センター 平石 充

- ・その他の報告

「古墳時代玉類の材質分析調査報告」 奈良県立橿原考古学研究所 柳田明進

- ・研究報告、各県報告、共同考察テーマに即した分科会、中間研究発表会の打合せ

- ・オプション

「玉類資料・施設見学」 島根県埋蔵文化財調査センター、出雲玉作資料館・史跡出雲玉作跡、八雲立つ風土記の丘

第3回研究集会（福岡県）

開催日：平成28年3月16日（水）・17日（木）、オプション18日（金）

会 場：福岡県吉塚合同庁舎

- ・基調講演

「水晶製玉作研究の展開と課題」 九州国立博物館 河野一隆

「福岡県の玉類研究に関する現状と課題」 福岡県教育委員会 吉田東明

- ・研究報告、共同考察テーマに即した分科会、次回研究集会の打合せ

- ・オプション

「玉類資料・施設見学」 福岡市埋蔵文化財センター、九州歴史資料館

第4回研究集会（石川県）

開催日：平成28年7月27日（水）・28日（木）、オプション29日（金）

会 場：石川県女性センター

- ・基調講演

「石川県加賀地方における石製玉類の石材」（公財）石川県埋蔵文化財センター 西田昌弘

「古墳時代後期の玉の流通」 加賀市教育委員会 戸根比呂子

- ・研究報告、共同考察テーマに即した分科会、中間研究発表会の打合せ、成果図書の検討、展示会の構想

・オブション

〔玉類資料・施設見学〕石川県埋蔵文化財センター、金沢市埋蔵文化財センター、加賀市教育委員会文化財保護課収蔵庫、〔発掘調査現場見学〕弓波遺跡

第5回研究集会（埼玉県）

開催日：平成29年2月1日（水）・2日（木）、オブション3日（金）

会 場：埼玉教育会館

・基調講演

「埼玉における古墳時代前期の玉作り遺跡とその背景」（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
赤熊浩一

・共同調査研究の取りまとめ、成果図書・シンポジウム・展覧会の打合せ

・オブション

〔玉類資料・施設見学〕埼玉県文化財収蔵施設、埼玉県立さきたま史跡の博物館

第6回研究集会（兵庫県）

開催日：平成29年8月1日（火）・2日（水）

会 場：兵庫県私学会館

・共同調査研究の取りまとめ、成果図書の編集・執筆方針、第3回講演会説明、展覧会の内容検討

第7回研究集会（奈良県）

開催日：平成30年1月25日（木）・26日（金）

会 場：奈良県立橿原考古学研究所

・共同調査研究の取りまとめ、成果図書の校正、展覧会の内容検討

第8回研究集会（島根県）

開催日：平成30年7月10日（火）・11日（水）

会 場：東京都江戸東京博物館、国際ファッションセンター

・成果図書の最終調整、展覧会の事前打ち合わせ・予定会場視察

第9回研究集会（福岡県）

開催日：平成31年1月30日（水）・31日（木）

会 場：福岡県庁吉塚合同庁舎、九州国立博物館

・第1期「古墳時代の玉類」の総括（江戸博企画展・成果図書・研究集会・講演会・成果発表の方法）、展覧会 九州国立博物館会場の視察

（2）講演会（中間研究発表会）等

第1回 古代歴史文化協議会講演会（第1回中間研究発表会）

「古墳時代の玉作りと神まつり」

・日 時：平成27年11月15日（日）14:30～17:30

・会 場：よみうり大手町ホール（東京都）（定員500名）

・主 催：古代歴史文化協議会、読売新聞社

・基調講演

「たまと玉作り－玉作り遺跡調査の回顧とまつりの玉－」

國學院大學名誉教授 梶山林継 氏



- ・パネルディスカッション

テーマ「玉作り遺跡の調査と研究」

コーディネーター 島根県教育庁文化財課長 丹羽野裕

埼玉県、石川県、奈良県、鳥取県、島根県の研究担当者

- ・入場者数：430人（事前申し込み488人）

- ・第1回 古代歴史文化協議会講演会資料『古墳時代の玉作りと神まつり』を発行

第2回 古代歴史文化協議会講演会（第2回中間研究発表会）

「玉から古代日韓交流を探る」

- ・日 時：平成28年12月10日（土）13:00～17:00

- ・会 場：よみうり大手町ホール（東京都）（定員500名）

- ・主 催：古代歴史文化協議会、読売新聞社

- ・招待講演

「古代韓半島における硬玉製勾玉の移入とその歴史的な背景」

韓国 慶北大学校教授 朴天秀（パク チョンス）氏

- ・パネルディスカッション

テーマ「東アジアにおける日本の玉類」

コーディネーター 奈良県立橿原考古学研究所所長 菅谷文則

朴天秀氏、福井県、奈良県、和歌山県、福岡県、宮崎県の研究担当者

- ・入場者数：350人（事前申し込み数451人）

- ・第2回 古代歴史文化協議会講演会資料『玉から古代日韓交流を探る』を発行

第3回 古代歴史文化協議会講演会（研究のとりまとめのシンポジウム）

「古墳時代の玉飾りの世界」

- ・日 時：平成29年11月18日（土）13:00～17:00

- ・会 場：よみうり大手町ホール（東京都）（定員500名）

- ・主 催：古代歴史文化協議会、読売新聞社

- ・基調講演

「玉類研究から古墳時代像を見直す」

奈良県立橿原考古学研究所所長 菅谷文則

- ・パネルディスカッション

コーディネーター 島根県教育庁文化財課長 丹羽野裕

テーマ①「古墳時代の玉飾りの世界」

三重県、兵庫県、奈良県、岡山県、広島県、佐賀県の研究担当者

テーマ②「古墳時代の玉類」

三重県、兵庫県、奈良県、岡山県、広島県、佐賀県、石川県、福岡県の研究担当者

- ・入場者数：400人（事前申し込み数521人）

- ・第3回 古代歴史文化協議会講演会資料『古墳時代の玉飾りの世界』を発行



（3）韓国現地調査

平成27年度 新羅地域玉類調査

- ・期 間：平成27年12月21日～12月24日 3泊4日

- ・内 容：新羅古墳から出土した玉類を対象とする自然科学分析（蛍光 X 線分析、比重測定）、考古学的調査（実測・写真撮影）。

嶺南大学校博物館：慶山林堂洞古墳群出土の翡翠製勾玉

慶北大学校博物館：慶州皇吾洞34号墳出土の翡翠製勾玉、慶州味雛王陵古墳群出土の翡翠製勾玉、碧玉製勾玉ほか

- ・参 加：島根県、福岡県、奈良県の9名

- ・嶺南大学校博物館紀要『継往開来』第15号（2015年）に調査成果を発表

平成28年度 加耶地域玉類調査

- ・期 間：平成28年8月28日～8月31日 3泊4日

- ・内 容：加耶古墳から出土した玉類を対象とする自然科学分析（蛍光 X 線分析、比重測定）、考古学的調査（実測・写真撮影）。

慶尚大学校博物館：陝川玉田古墳群出土の翡翠製勾玉、金製勾玉

釜山大学校博物館：東萊館福泉洞古墳群出土の翡翠製勾玉

福泉博物館：東萊福泉洞古墳群出土の翡翠製勾玉ほか

- ・参 加：石川県、島根県、福岡県、奈良県の10名

平成29年度 百済地域玉類調査

- ・期 間：平成30年2月27日～3月2日 3泊4日

- ・内 容：百済古墳から出土した玉類を対象とする考古学的調査（実測・写真撮影）。

国立羅州文化財研究所：霊岩沃野里方台形古墳、高興野幕古墳、羅州丁村古墳、羅州大安里方斗古墳出土玉類（翡翠製勾玉、碧玉製勾玉を含む）

- ・参 加：埼玉県、島根県、福岡県、奈良県の8名

（4）ホームページの開設

古代歴史文化協議会ホームページ

- ・開設日：平成28年11月24日
URL <http://kodairekibunkyo.jp/>
- ・古代歴史文化協議会主催のイベント（講演会、展覧会）のほか、参加各県単独主催のイベントなどの案内を掲載。
- ・14県の集成による約5,300遺跡の「玉出土遺跡データベース」（玉類出土古墳・集落遺跡データ、玉作り関連遺跡データ、文献データ等）を掲載。



（5）成果図書

『玉－古代を彩る至宝－』（ハーベスト出版、定価1,800円＋税）の刊行

- ・A5判 フルカラー 本文229ページ
- ・平成30年10月9日刊行、初刷3,000部
- ・同年11月下旬 第2刷2,000部増刷

(6) 展覧会

東京都江戸東京博物館

- ・期 間：平成30年10月23日（火）～12月9日（日）
- ・会 場：東京都江戸東京博物館 常設展示室内5F 企画展示室
- ・主 催：東京都、東京都江戸東京博物館、古代歴史文化協議会
- ・展示品：74件 約12,000点（国宝1件、重要文化財8件を含む）
- ・観覧者数：60,234人
- ・関連行事：連続ミニ講座 計14回（各県1回担当）、参加者のべ712人
ミュージアムトーク 計3回（奈良、島根、福岡の幹事県3県）、参加者のべ112人

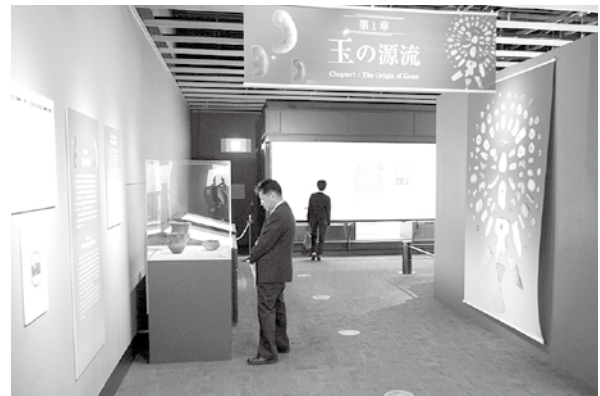


九州国立博物館

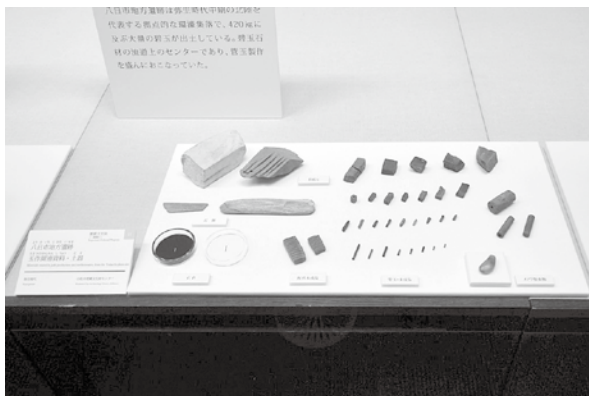
- ・期 間：平成31年1月1日（火・祝）～2月24日（日）
- ・会 場：九州国立博物館 文化交流展示室内3室
- ・主 催：九州国立博物館、福岡県、古代歴史文化協議会
- ・展示品：70件 8,146点
- ・観覧者数：49,351人



東京都江戸東京博物館展覧会場



東京会場の様子



八日市地方遺跡出土品（重要文化財）



雨の宮1号墳出土品（重要文化財）



九州国立博物館展覧会場



九州会場の様子

4. 集成作業と石川県の様相

古墳時代には、多様な素材を用いて勾玉、管玉をはじめとした様々な玉類が作られ、使われていた。その数は全国で数十万個にも及び、その膨大さから総括的な研究も難しい状況であった。

そこで、古代歴史文化協議会に参加する14県は、まずそれぞれの県で一体どれぐらいの数の玉類が出土しているのかを知るため、データベースを作成することとした。一点一点の資料を正確に把握する積み上げ作業こそ、基礎的な科学的データとして研究の裏付けとなるからである。

集成作業は、主に発掘調査報告書や自治体史誌などを紐解いての悉皆的な調査を基本としたが、物によっては実物の観察も行い、集落・古墳などの「消費遺跡」からの出土例と、玉作り遺跡などの「生産遺跡」とに分けて作業を進めた。

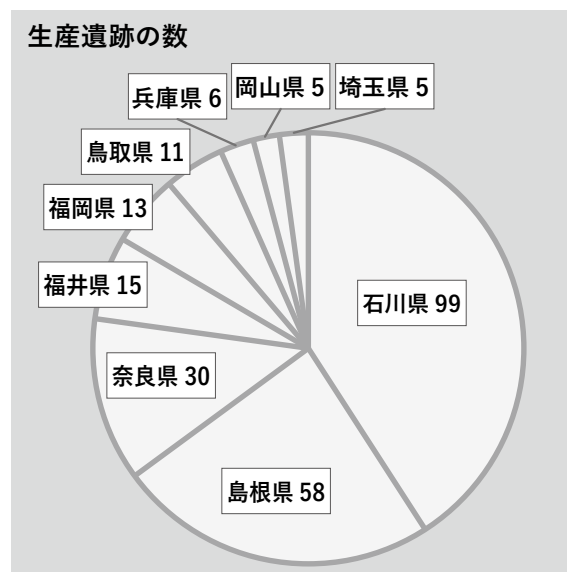
14県の集成データは、古代歴史文化協議会ホームページからダウンロードできるようになっており、誰でもが研究材料として利用可能である。ただ、集成データは報告書などの記載内容を基本としており、県によりデータの種類が異なっていたり、文言の揺れや精度のばらつきがあることも否めないことから、取り扱いには注意が必要である。

石川県においては、平成27年7月に各市町教育委員会に協力を依頼し、最終的には消費遺跡で174遺跡13,779点、生産遺跡で99遺跡11,707点もの集成作業となった。ご協力いただいた各市町担当者の方々には、この場を借りて感謝申し上げたい。

石川県の集成結果で特筆されることは、生産遺跡が飛び抜けて多いことである。14県以外のデータを持ち合わせていないが、複数の玉作り遺跡の報告がある滋賀県、京都府、富山県、新潟県などを加えても、その数は突出しているものと考えられる。

生産遺跡は、良質の碧玉や緑色凝灰岩を産出する南加賀や北加賀の山間部を背景に、加賀地域の平野部を中心に分布しているが、七尾市東三階A遺跡や羽咋市太田ニシカワダ遺跡など、石材の産地から離れた能登でも玉作りが行われている。

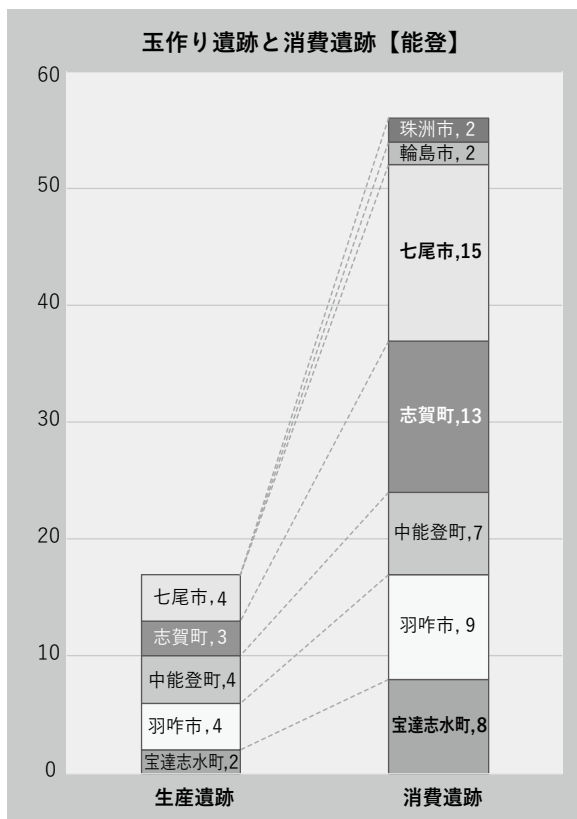
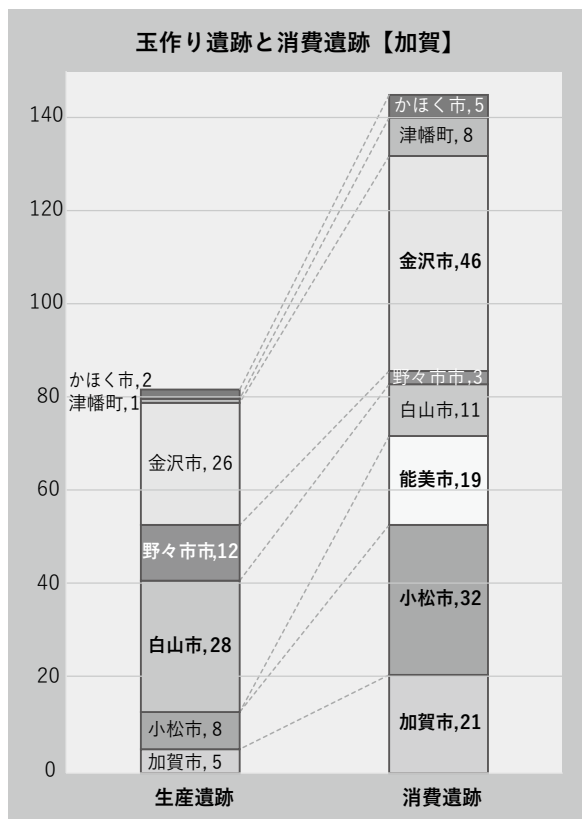
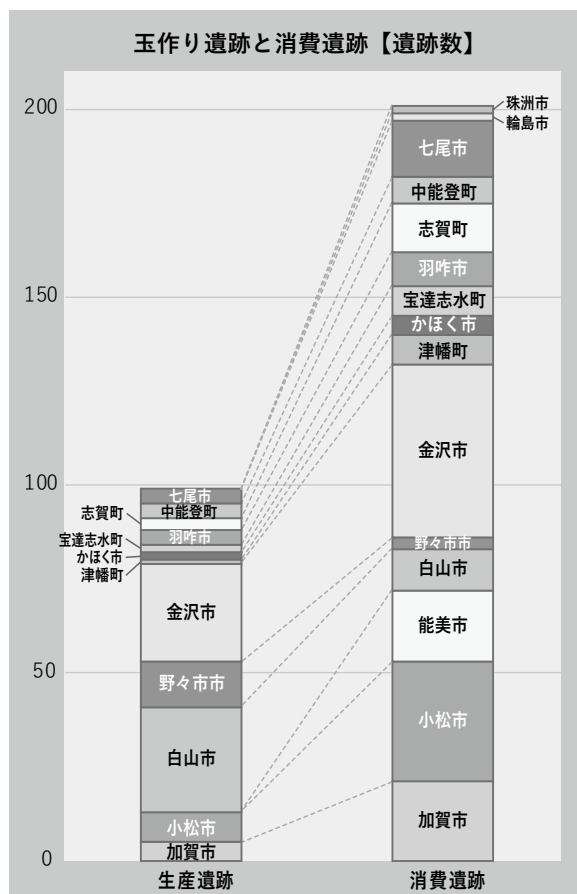
また、加賀市片山津玉造遺跡のような専門化した集落が存在する一方、わずかな未成品等の出土



にとどまる集落が多数あり、多様な生産の様相を垣間見ることができる。

次に、生産遺跡と消費遺跡の関係をみると、金沢、野々市、白山の北加賀地域で遺跡数では生産遺跡の70%近くを占めるが、同地域での消費遺跡数は30%程度にとどまる。これに対し、生産遺跡が13%程度の南加賀にあっては、消費遺跡が35%を占める。主要な生産地域と玉類を保有する人物の、墓域を含む生活域が必ずしも一致していないことが分かる。

もう1つ注目すべきことは、弥生時代中期に小松市八日市地方遺跡や羽咋市吉崎・次場遺跡などの拠点集落で始まった碧玉の管玉や翡翠の勾玉を中心とするこの地域での玉作りが、碧玉製宝器類の独占的生産の時期を経て、古墳時代前期ではほぼ終息するということである。これは、この時期を境に祭祀の形態が変化し、権威や権力を表す器物が、玉や石製品から武器や武具などに移っていったことや、玉に対する価値観の変化などと連動した動きとみることができ、畿内大王権と北陸や他地域との関係が大きく変化したことを読み取ることができる。



集成作業では遺跡数のほか、玉の出土点数についても集成を行っているが、1件で膨大な出土点数がある白玉や小玉などが含まれており、少数の出土が一般的な勾玉などと同列に扱うことが適当ではないため、玉の種類ごとあるいはテーマを設定し、それに沿ったデータ抽出を行ったうえで検討を加える必要があろう。

ここでは、今回の集成作業から読み取ることができた石川県内の概略を示したが、基礎となる14県のデータを、研究材料として積極的に活用願いたい。

5. 14県共同調査研究の成果

共同調査研究ではこの集成作業を通じ、「古墳時代の玉類」の状況に各県（地域）ごとの特徴が現れることを重視し、研究のアプローチ方法を3つに分けて考え、それぞれに分科会を設置した。玉類を生産した遺跡や玉類の生産技術などの分析・研究を行う「玉類生産遺跡の研究」分科会。集落遺跡や古墳など、玉類を消費した遺跡での出土状況などから、古墳時代の玉類がもつ社会的機能とその流通の研究を行う「玉類の流通と消費の研究」分科会。そして、日本国内に留まらず、大陸や朝鮮半島から日本に持ち運ばれた玉、あるいは日本から朝鮮半島に渡った玉から、古墳時代の国際交流を考える「東アジア世界における日本の玉類」分科会である。

それぞれの分科会で検討を重ね、それを集約した結果、弥生時代から飛鳥時代に至る玉の生産体制の変遷、社会的機能やその意義の変化、朝鮮半島やアジア各地との交流など、玉類をめぐる動きが、当時の日本列島における社会の大きな動きと連動したものであったことが明らかになった。

日本海側一帯は、緑色凝灰岩や碧玉、火山性の鉱物や岩石を産出するグリーンタフ地帯として知られている。北陸は特に良質なそれらの石材を産出することから、弥生時代中頃から玉の一大生産地となった。玉に利用された石材は、碧玉、緑色凝灰岩、鉄石英などほのか、糸魚川市姫川流域周辺で産出する翡翠などであり、紀伊半島から四国で産出する紅簾片岩の石鋸を用いた施溝分割技法で玉作りが行われている。また、モノだけでなく、工人が関東地方などに移動して玉作りをはじめると、広域の地域間交流があったことが明らかになっている。

弥生時代後期末～古墳時代前期初頭という日本列島の広い範囲で社会の仕組みが変わる時、玉作りの体制にも変化が生じ、技術的にも鉄器の使用が一般的になる。大和を中心とする強大な権力が出現した古墳時代前期前半頃、鏡を大量に副葬する古墳、例えば京都府椿井大塚山古墳、奈良県黒塚古墳、兵庫県西求女塚古墳など畿内の古墳では、鏡や鉄剣などの副葬品は目立つが、玉類の副葬はほとんどみられない。古墳での副葬が低調なこの時、山陰・北陸など弥生時代に玉作りの拠点であった地域でも、玉作り集団の再編に伴い玉生産が縮小・集約される時期がみられる。このことは、玉作り集団たちも社会の急激な変動とは無縁でなかったことのあらわれと考えられる。ただこの時期、北陸は大和の王権と強い結びつきを持ち、各地の有力古墳に副葬される鋤形石や車輪石、石釧を中心とした碧玉製宝器類を独占的に生産する。

前期中頃からは古墳に副葬される玉類が再び増加しはじめる。この頃は、翡翠製勾玉を中心に碧玉製管玉を連ねた頸飾りが好まれた。その生産は、翡翠や碧玉を産出する北陸を中心として活発に行われた。

一方、山陰（出雲）で玉作りが再び活発になるのは前期後半である。それまで主体であった碧玉に加え、メノウ、水晶を素材として勾玉の生産を開始し生産量を増やす。それまでも赤い勾玉はコハクでは作られていたが極めて希少であった。しかし、玉に利用される素材が増え、メノウの赤、水晶の白・透明、ガラスの青・黄色など、玉の色彩が豊かになったことで、相対的に翡翠や碧玉・緑色凝灰

岩の緑に対する価値観が低下したのかも知れない。

畿内中枢では、前期末から大和の奈良県曽我遺跡において、集中的に玉作りを始める。この工房には全国から玉作り工人と石材、道具類が集められ、ほかに例を見ないほどの大規模な生産が行われた。出雲の工人は、曽我遺跡での玉作りの技術的中心となって中央での生産活動に携わったほか、地元の出雲においても玉生産を行っている。

こうした流れの中で、古墳時代中期には再び玉作りの画期が訪れる。それまで最大の玉生産地帯であった北陸の玉作りが終焉を迎える。

さらに、古墳時代後期に入ると、全盛を誇った曽我遺跡での玉生産に変化が訪れる。それまで畿内中枢の膝元に集められて生産活動をしていた各種工人は、原料調達などの実態に即して生産場所を変えたのである。

こうした動きは、鉄製武器・武具類やそれらの滑石製模造品などが重宝されることにより、祭祀の道具あるいは装身具、副葬品などとしての玉類の需要が低下したことの現れとみることができるのではないだろうか。

こうして、後期中頃から、日本列島での大規模な玉作りは出雲花仙山周辺に収斂されていった。その後、飛鳥時代中頃まで「古墳時代的」な玉生産が行われているが、律令制度が始まる7世紀後半には玉作りは急速に衰退していく。

玉は、弥生時代に装身具として作られ始め、交易品として各地へ運ばれる。古墳時代には畿内の王権や各地の首長の権威・権力の象徴として重要視されたが、武人が活躍する中期以降は玉に対する価値観が変化する。さらに、律令国家の新システムが成立するとその役割を終える。14県が研究成果を持ち寄ることにより、こうした大きな流れを、列島規模でダイナミックに俯瞰することが可能となったことは、共同調査研究の目的の一つであり大きな成果である。

さらに詳しい解説は、成果図書『玉－古代を彩る至宝－』を是非ご覧いただきたい。玉の歴史的意義や基本知識が程良く学術的及び一般向けのバランスがとれた内容となっており、古墳時代の玉を理解するための教科書的な1冊との評価も得ているところである。

6. おわりに

冒頭にも書いたが、共同調査研究の最初のテーマとして「古墳時代の玉類」を3年半にわたって調査研究し、成果図書の刊行と展覧会の開催で一区切りを付けたところである。協議会では、その反省点や課題を総括し、それを踏まえたうえで、すでに第2期のテーマを「弥生・古墳時代の刀剣類」として調査研究のスタートを切っている。玉類に引き続き、共同調査研究事業の広域性が強みとなるテーマであり、これも大きな成果を期待したい。